大原富枝「婉という女」論
――歴史小説と自伝小説――

勝倉壽一

一　歴史小説の拒否

大原富枝の歴史小説「婉という女」は、昭和三十五年二月の「群像」に発表され、毎日出版文化賞、野間文芸賞を受賞した。作者四十八歳の時の作品である。

ところで、大原は、この作品が「歴史小説」として規定・評価されることへの違和感を数度にわたって記している。

婉を書くとき私には歴史小説を書くという意識は全くなかった。作家はいつの時代、いかなる人物に素材を借りても、結局は自分を描くことしかできないものなのである。それが小説というものの宿命であり、生命であると思う。[1]

この言葉は、歴史小説が過去のいかなる時代・人物・事件などに取材しようとも、文字通りに「歴史」（過去の事実）の再現ではありえず、素材への作家の主体的な関わり、作家自身の思索と主張を語る場として要請されたのだという見解の表明と解されよう。しかし、大原は次のようにも言う。

最初に「婉という女」を書いたときも、歴史小説という自覚は持たなかった。むしろ、フランスの心理小説の系譜だと思って書いていた。……たまたまそれが徳川初期の人物であったために「歴史小説」という枠にはめられてしまった。そのことは私にとって少々迷惑でないこともなかった。[2]

また、別に「物語を書くつもりは全くなく、歴史小説という気持もなくて、むしろ、そのとき理想として私の頭のなかにあったのは、フランスの心理小説であった」[3]とも述べている。「婉という女」を歴史小説の範疇に加えられることへの、作者のこの明確な拒否の姿勢はどのように理解されるべきなのであろうか。

上田三四二氏は、「婉という女」は「大原氏の『女であること』への問いかけの書」「『生きること』への問いかけの書」であるという。[4]また、野中婉という歴史上の人物の生涯を「書く」ことを通して、大原富枝がそこにいかなる「自分を描」いたか、そのことは大原文芸の基本的性格をなす「生きること」「愛すること」といかに結びつくものであったのかという問いについては、すでに長谷川和子氏の論が備わる。[5]そして、その問いの直接の契機として、戦死した恋人への作者のこだわりが挙げられる。

両氏の見解に従えば、「婉という女」は、故郷の歴史上の人物の史実を素材として、作者の実体験に根ざした「生きること」「女であること」「愛すること」の問いを、フランス心理小説の方法を用いて描いた自伝小説的作品と規定されようか。事実、大原は六十三歳の時に発表した自伝小

説『告げる言葉―風のなかのあなたに』の「あとがき」に、次のように記している。

若い日の辛かった恋愛も『婉という女』のなかにすべてを書き尽くしたというふうに思っていたのです。小説というものを私はそういうふうに考えていて、それがこの作品を自分では決して歴史小説と考えていないゆえんでもあります。[6]

作者の青春の日に深い傷痕を残した「若い日の辛かった恋愛」を、野中婉という歴史上の人物の心理に託して描いたのがこの作品であるというのである。同時期の歴史小説『建礼門院右京大夫』の「あとがき」に「私自身、ある人の戦死をいまも胸に刻んで生きており、それがこの作品を書くモチーフともなっています。[7]」と記しており、そこに共通する創作意識と方法を認めることができる。

しかし、「婉という女」を歴史小説と規定・評価されることへの作者のこだわりが、表現主体である作者の実体験に根ざした自己表出の場の確保を意味するものであったとしても、そのことはこの小説が歴史小説の諸特徴を備えた作品であることを否定することには繋がらない。その特徴として、まず以下のことが確認される。

◇歴史的事実として、寛文から享保に至る六十五年間を生き、土佐藩政を独裁した父野中兼山の施政への追罰として、幼時から中年までの四十年間にわたる幽囚の境涯を強いられた野中婉という女性が実在し、その生涯を描いたものであること。

◇幽囚から解放後に婉が暮らした住居跡、婉の手になる肉親の墓碑とその碑銘が存在し、作者自身、数度の現地調査に基づき、史実と関係資料を踏まえて作品を制作していること。

◇婉が土佐の儒学者谷秦山に宛てた書簡を手写する機会を有したこと。その原史料が空襲により焼失したため、作者の手写したものが唯一の史料となった。それを用いた「婉という女」は、婉と秦山の真の交流を解明した著作という性格を有すること。

（二）

その長年にわたる史的事実の調査・考察、及び関係資料を基盤として、作者の「女であること」「生きること」への問いかけはなされたのである。その問いが真摯なものであればそれだけ、婉の四十年にわたる幽囚生活を強いた酷薄な史実への追尋は厳しく、そのことはまた、歴史の事実に対決を試み、真実を捉えようとする歴史小説作家の主体的な関わりを証明するものであったからである。[8]

「私の取材ノート―婉という女」[9]によれば、作者は、吉野高等尋常小学校の校長で国文学と歴史好きの父亀次郎から野中兼山の話を聞き、父に従って兼山一族に関わる史跡を訪ね歩いた少女時代の体験と、父の蔵書中の関係資料に拠って兼山・婉に関わる正確な史実、伝承を把握した。[10]「お婉さんを書きたいという」「念願」を持った作者は、父の蔵書中から婉の資料を見つけたが、「すっかり烈女あつかいで」「とても納得がゆかな」かったという。

一方、昭和十九年三月、作者は高知県立図書館長の好意で婉の秦山宛自筆書簡の写し二十六通を披見し、[11]筆写する機会を得た。真蹟は翌二十年五月の空襲により焼失した。

婉の手紙の二十通が焼失してしまって、私の手もとにその写しが辛うじて残ったという運命のめぐり合せは、私にのがれることのできない一つの負荷としていつも意識にあった。（略）婉のいいたかったことを、私はこんどこそ作品のなかで人々に話しかけたかった。[12]

歴史上の人物の書簡を自分だけが筆写し保持しているという事実から、その書簡を通して作者は烈女に祭り上げられた女性の真情に共鳴し、虚妄な偶像ではない生きた真実を明らかにする責任を自らに課することになる。その「負荷」の意識は、次の言葉に通底するものであろう。

資料によってどうしても解明することのできない部分、そこにこそ歴史小説の生命があるといってもいいかとも思う。／「婉という女」の野中婉と、土佐一条家の「於雪」とは、私が心惹かれて、いつかは作品化することによって人々の心に生かしてやりたい、と願った

故里の「歴史のなかの女」である。[13]

ここで、作者は「婉という女」を「歴史小説」に位置づけるのみならず、その「生命」として、「資料によってどうしても解明することのできない部分」に肉薄し、「婉のいいたかったこと」の「作品化」を制作の目的として明示しているのである。

すなわち、「婉という女」は、故郷の史実として四十年の幽閉生活を生き抜いた野中婉の生涯を作品化することにより、偶像化された虚像ではなくその心情の真実を語り伝える願いと、不遇な境涯を生きた婉の心情に闘病生活を生きた自らとの共通項を見出し[14]、「生きること」「女であること」の意味を問う、作者自身の真摯な問題意識を基に制作された歴史小説であった。のみならず、その執筆が作者の心に深い傷痕を残した恋人浜田可昌との死別問題の検証を目的とした、自伝小説的性格との複雑な複合体として成立したことを見逃してはなるまい。

二　「秋砧」の位置

昭和二十一年九・十月、三十四歳の大原富枝は自ら「婉という女」の「習作」と位置づける「秋砧―婉女物語―」（「新文学」）を発表している。作者自身、この八十枚ほどの習作は「決して意に足るものではな」[15]いと断じており、事実、十三年後の昭和三十四年、四十七歳の時に大作「婉という女」として完成されることになるのだが、作品の基本的な構図は既にこの習作に明瞭に現れている。

「秋砧」は、作者自身の「不幸な恋」と「婉女物語」の結合を記す序章と、四十年の幽囚生活から解放された婉による父兼山の気質・事業への批評、藩の当局者による子女への報復の必然を思う第一章、婉と谷秦山との出会いと交流を記す第二章、秦山の蟄居と死を記す第三章、及び後記風の文章から構成されており、全体が婉の心理の動きを細叙する形で展開する。

序章は、作者の「不幸な恋」の相手浜田可昌の印象、喀血を続ける「自分の生命の脆弱さ」と、「戦争の重圧につぶされない逞ましい現実的な足場を踏まへてゐ」る「彼のかくしてゐた女」の存在への「恐怖」を語り、婉の書簡との出会いを経て、「四十年を幽囚の家に過した婉女」と「日本といふ小さい島の狂気のるつぼの中に閉じこめられてゐた私たちの世代」とに「どつちも負けぬ程の不幸」を捉え、秦山に寄せる婉女の「ひとすぢのゆたかな思慕」に比べて、自分の恋の「未熟な貧寒な姿」を侘びしく顧みる。次いで、兼山・婉の史跡を訪ね、婉の悲劇的な生涯の根源をなした父兼山の気質を想像し、晩秋の静寂の中に「婉女のいのちの慟哭が幾百年相伝へて、私といふ女身のなかでいまもあり〳〵息づいてゐるやうに」感じる。彼女の悲劇は「あの封建制度の中なればこそ」と思う反面、「その中にだけあるものではなく」、「いつの世にも女のいのちの内に蔵してゐる宿業に通ひ合つてゐ」ると感じるが、一方、「秦山への生涯の思慕のひたむきさ」に、婉の悲劇的な生涯の「いのちを華やがせる素因」をも認めている。

末尾の後記風の文章によれば、作者は昭和十九年の年末から二十年三月の硫黄島陥落の日にかけて、東京空襲下で高射機関砲の音を聞く「日々絶望と恐怖と窮乏の中で」、「昔の悪い時代（封建の）にしかも宿命的に虐げられた女人は、一体どんなふうに自分のいのちを生かせて行つたのかと考へてみたかつた」と記している。

右に略述したように、「秋砧」は歴史上の人物の境涯に自らを重ね、「生きること」「女であること」を問う作品の構図から、野中兼山・婉・谷秦山の史実の記述、幽囚生活、解放後のエピソードの配置に至るまで、後年の「婉という女」の祖型と呼ぶべき形態を備えていた。にもかかわらず、この作品が作者自身によって独立した作品の位置を奪われ、「婉という女」の執筆になお十三年の歳月を要し、婉の解放時の年齢を越えた四十七歳の時に完成を見たのはいかなる事情によるのであろうか。

その理由について、作者は「四十三歳で幽獄を出た婉の生涯を描くた

めには、私もまた四十年の女の生涯を生きてみなければならなかった」[16]

「婉が四十三歳で赦免を受け、初めて人間の世界に仲間入りを許された、その思いのかずかずを、なんとか自身で満足出来るところまで書ききることが可能になるためには、非才の私自身も、四十数年の女の生涯を生きてみることが必要であったのだ」[17]と述べている。

しかし、戦時下の暗黒の青春時代、作者の心に重い傷痕を残して戦死した恋人との「未熟な貧寒な」恋の破局に耐えつつ、封建制度下に四十年の幽囚生活の境涯を秦山への一途な恋に生きた史上の女性との精神的な紐帯を希求した「秋砧」に比して、四十代に至る作者の戦後十五年の歳月はそれに勝るいかなる意味を有していたのであろうか。その秘密を開示するのは、作者八十四歳の時に書かれた次の文章であろう。

四十数歳で外の世界にいきなり投げ出された婉を描くには、書き手としてのわたしにも四十歳代の孤りで生きる女の味わう心身の苦悩が必要であった。若くて結婚し、夫という堅固な庇護のもとに身を置いて生涯を生きる女たちの、決して知るはずのない種類のかずかずの屈辱や、俗世間的な困難と苦渋。外部からのそれらにも増して耐えがたく苦しい自分自身の内部から湧いてくる肉体の呻き。／それらの内外からのせめぎと屈辱を真正面から受けとめ、自分を制御してゆく、孤独な女の四十代を、わたし自身も、耐え凌いで生ききってみることなしに、婉の生涯が描けるはずはなかったのである。[18]

作者は、婉の秦山宛書簡を披見した日から「婉という女」の作品化に十五年の歳月を要した事情を、「この時期、わたしに不足していたのは、はっきり言えばわたしの女としての年齢であり、その間に味わうべきはずの発酵と熟成のような、微妙な内的要素であった」と言う。自らの体験に裏打ちされた、独身の女であるがゆえの屈辱、困難、苦渋、閉ざされた性の呻きを、歴史上の女である婉の心理の動きに投影する手法である。そのことはまた、婉に同じく〈産むことを禁じられた女〉として生きた自らの半生を検証する営みでもあった。

（四）

「婉という女」を「秋砧」と比較するとき、新たに〈男〉と〈女〉という種別化の意識が顕在化し、「お仕置」（政治・事業）という印象的な用語のもとに政治的人間である男の客観化がはかられるとともに、幽囚生活における閉ざされた性の芽生えと衝動、肉欲の呻き、近親相姦の夢想の記述、独身女性の対世間意識などの屈辱・困難・苦渋が書き込まれたことが注目される。

大原富枝は、自らの「不幸な恋」を含む不遇な半生を検証する文学上の生涯的な課題「生きること」「女であること」の問いを、歴史上の実在女性の生涯を辿ることを通して追求した。そのために、婉をその生きた歴史の時空間の中に正確に据えて捉え直すとともに、孤独な女の四十代を生きた作者の実体験は婉の生涯とその思念の中に溶解される。作品世界は主人公婉の回想形式に整えられ、作者自身に関わる自伝的要素はすべて削除されることになった。その位相を作者は、

「婉」のなかにすっぽりとはまってゆくことのできるものが私にあって、「婉」のいいたいことがそのまま私のいいたいことであり、「婉」の生命がそのまま私の生命であると思うことに、抵抗感がなかった。／十七歳のころから病床にとらわれ過ごした私の青春が、幽獄の中で無為に四十年を生きた彼女の生涯と、ほとんど無理なく重なって感じられ、彼女の愛した男たちへの想いが、そのまま私の愛した男たちへの想いであった。（略）この小説のなかでこそ自分は生きたと思えるとき（傍点作者）が幸福だと思う。[19]

と述べている。作者が「フランス心理小説の系譜」を強調し、歴史小説に枠づけされることへの忌避の思いを綴った所以である。

しかし、歴史上の女性の生涯と思念に託した自己検証は、

◇婉の出自である「野中家の血筋」「野中家の気質」がもたらす必然の糸の遡及。

◇父野中兼山の事績を生み出した気質・学問、兼山の登場と執政を要請した藩政上の条件の分析。

◇兼山とその一族の悲劇を生み出した藩政上、幕藩体制上の問題の位置づけ。

などの史実の追尋と、作者の歴史認識の投影という正当な歴史小説の方法において保障されたのであった。なかんずく、作者の歴史認識の独自性は、＜女性の位相＞の明確化にあった。作者は「私の取材ノート―婉という女」に、次のように記している。

男というものが生涯を賭ける政治というもの、事業というもの。人間が幾世代を経ても繰返す、政治という名においての残虐さ。政治にも事業にも参加することのできない場所に置かれている女というもののそれをじっと見つめている眼。女は何も言えなかったし、何もすることはできなかったけれども、じっと真実を見ていた。女に眼があるのは、歴史の真実を見てとるためなのだ、そう思った。

四十年間にわたる幽囚生活を強いられた婉による運命と自らの生の検証の眼は、必然的にその総括として男の生きる世界、「お仕置」（政治・事業）の対象化を可能にするとともに、被支配者・服従者・傍観者であることにより、＜歴史の洞察者＞の位相を獲得する女人像の定着に成功したのでもあった。大原富枝の歴史小説の独自性と正統性を証するものであろう。

三　「生きること」

大原富枝の文学の特徴として「生きること」への強烈な渇望が挙げられるが、「婉という女」も一一三例に及ぶ動詞「生きる」を用いて構成されている。全五章のうち第四章が「生きること」と題されたことにも、作者の意図は明瞭であろう。そのことはまた、「死」の記述、死への言及の多出という特徴をも示している。

・思えばこの四十年間、わたくしの身辺には朽葉のようにおびただしく死が累積した。姉上、長兄、次兄、三兄、そして弟、祖母上や異腹の兄姉たちの母たち、市女と、そして召使いの者たち数人……／いまは「死」こそ、わたくしにとってもっとも親しく近しいものになった。死者たちは、自分たちの生命がただ死ぬためにのみ在ったのだ、ということをよく知っている。[20]〔三〕

・父上以外のこのみ堂の住人たちは、まるで死ぬためにだけ生きてきたような人たちであった。死ぬことだけを唯一の目的として、人に待たれた哀れな人々であった。〔五〕

幽囚の定めとその現実は、ただ死ぬためのみに生き、死ぬことによってのみ幽囚の境涯から解き放たれる。幽閉の処置をとった政治の側からも、警護の者たちからも死ぬことのみを待たれていた人々、それが幽囚の運命であった。しかも、その存在は男女によって明確に区別される。政治の側の酷薄な処置は「男系絶えて野中家の血が絶え」ることを唯一・絶対の目的とするものであり、婦女が存生していても「腹は借りもの」にすぎない。

この獄舎に十五年間、兄上は耐えて死んでいった。生命ある限り、赦されることのないことを、兄上は知っていた。／しかしまた、生きるということがどういうことかをも兄上は片端ながら知っていた。そして獄舎でもまた生きなければならない、と考えていた。／幼い罪囚の弟妹に生きることを教えてやらなければならないと決心していた。〔一〕

長兄清七は十六歳で入獄した。三歳の時、父の切支丹嫌疑により幕府の人質として江戸住みとなり、十五歳の時に父の失脚により江戸から呼び戻されて家督を継ぎ、翌年三月、追罰として宿毛に配流され、十五年間の配流生活に耐えて三十一歳で死んだ。しかし、清七は、政治の動きに翻弄され、死による野中家の断絶を待たれた無意味な配流生活の中に生きる意味を見出す。野中家の当主の自覚と責任のもとに幽囚の一族を統括し、幼い弟妹に学問を教授する。父野中兼山の業績を顕彰し、その「犠牲」として自らの境涯を位置づける。その生の意味づけは、三兄希

四郎に継承される。

わしは父上ほどの人の子に生れて、生涯を獄舎に果てることを無念とは思わぬ。兄上も生前そういわれた。（略）偉大さというものは、残酷なものだ、偉大さはいつも犠牲を要求する。（略）わしもこれを運命と思って受ける。諦めではない。積極的にこれを享けるのだ。

ここには身体の自由はない。しかし、精神の自由はある。〔一〕

父の偉大さを精神的支柱として、酷薄な運命に殉じる生き方である。偉大な業績がその結末として犠牲を要求する残酷な運命に殉じることで、父との一体化をはたす。失脚後の父の胸中を忖度し、その無念の思いを共有することで、〈犠牲〉という運命に自らの生きる積極的な意義を見出そうとする。したがって、「父上についての品定はここでは禁じられ」る。「父上の行ったお仕置、父上の偉大さ、それらを疑うことは、わたくしたちがすでに二十年をここに幽囚の身として暮してきた意味を、根底から揺すぶること」になり、「無慚なばかりにみじめ」な境涯に陥ることになるからである。

しかし、婉の眼は長兄清七の「ふっと反らしたその眼に、思いがけなく、弟妹に対しては秘し匿している兄上の、生きることの空しさ、学問への心の空しさを、見てしまっ」ていた。当主の自覚と責任、父の偉大さの逆証明である「犠牲」の位相への定位という精神的矜持を生の意味と力の源泉としてきた長兄の、その心を蝕む〈虚無〉を覗き見た婉に、三兄希四郎の言葉をそのまま共有することはできない。

婉の疑問と反発の思いは、「生きる」と「置かれる」の語の殊更な対置において語られる。

門外一歩を禁じられ、結婚を禁じられて、四十年間をわたくしたちはここに置かれた。他人との面会を許されず、他人と話すことを許されないで、わたくしたち家族はここに置かれていた。／わたくしたち兄妹は誰も生きることはしなかったのだ。ただ置かれてあったのだ。〔一〕

（六）

幽獄の中に「置かれた」〈物〉に等しい境涯の中で、婉はひたすらに「生きること」の実感、実体験を渇望する。小説一篇の全体は、〈物〉に等しい幽囚の境涯から解放への希求、さらには解放後の実体験を経て、俗世間との交際の一切を峻拒する〈物〉への回帰の物語として展開する。

長兄清七の死から四年後の次兄欽六の狂死は、長兄への「引け目、劣等感、卑小感であり、無力感」であった。しかし、婉は狂気を発して座敷牢に閉じ込められた欽六の野獣と化した姿におののきつつ、「性別のない不思議な人間の集い」という「いつわりの生活の空しさ」が、「やさしい心と傷つき易い、脆い魂をもったはにかみ深い」欽六を決定的に追い詰めたことを見据えていた。

現実社会との関わりを持たず、実体験を伴わない学問の空虚さと、閉ざされた性の疼きは、幽囚の兄妹の中に〈兄妹相姦の夢想〉という「根深」く「醸しだされる頽廃」を生み出していく。宿毛配流から二十三年後、高知の儒学者谷秦山（丹三郎）の突然の出現は、二十六歳の婉を虚無と狂気の深淵から救済することになる。

この事実は、生きる意味を見失い、信じることのできなくなろうとしていたわたくしたち兄妹のあいだに、黴のように巣食いはじめていた頽廃を、危いところで堰きとめてくれた。（略）むしろ何も知らず、この檻の中に兄上と相愛して、禽獣のように無邪気に、あるがままの生命を愉しんで果てることができたら、とその仕合せを心秘かに思うことさえあったのだ。〔三〕

秦山の出現という「奇蹟」は、生きることへの実体験を渇望し続けた婉の心に「生命が滾り流れ」る「女のいのちの燃焼」を実感させる。

それは初めてわたくしが夢うつつに知った女のいのちの燃焼の一瞬であった。（略）力が、身内から噴き溢れている。手足のはしばしまで、生命が滾り流れている。／自分というものをわたくしは初めて知り、初めて確かめていた。（略）わたくしは知っている。このときから、わたくしはそのひとのなかで生きはじめたのだ、と。谷丹三

郎という一人の男のなかに。貧しい、痩せた青年儒学者のなかに……／そのひとは、もはやわたくしのものであった。どんなにわたくしがそのひとを欲しがっていたか、わたくしにはよくわかる。〔三〕

小説の世界は「生きること」という主題が「女であること」と融合し、「女として生きること」に統一される。その時、＜男＞は＜女＞と対置され、性愛の対象である異性と、「お仕置」に関わる不可解な人間として客観化される。「女」六十二例、「男」八十七例、「お仕置」四十四例、「政治」七例という用語の頻出とその傾向性に、作者の意図は明瞭である。

長兄清七、次兄欽六、三兄希四郎をはじめ、谷秦山、解放後の婉と秦山との文使い役の若い農夫岡本弾七は夢想の性愛の対象であり、父野中兼山とその政敵たち、父兼山の事業に心酔する兄たちや秦山は、女の婉には理解しがたい不可解な政治的人間として捉えられる。「女として生きること」の意味を問う婉の眼が、「すぐれた男、非凡な器量をもったお奉行」という「偶像」であった父兼山の「お仕置」（政治・事業）に向けられるのは必然であった。

四　父親像の変遷

婉の思念はまず「父親という一人の激越な理想家、理想を追って短い生涯をお仕置（政治）に賭けた男の、血に対するあの人々の執拗、無残な憎しみ」と、苛酷な禁獄を強いられた根源としての「野中家の血」「野中家の気質」に向けられる。土佐藩政確立期の奉行として、藩の体制確立に才腕を振るった野中兼山の血筋を、この地上世界から抹殺することを究極の目的とした子女の幽閉、子息の死滅のみが赦免の絶対条件であるとする苛酷な禁獄は、いわば兼山の事業・功績・存在の全否定を意味していた。作者大原富枝は、婉の思念を媒介として、兼山の血筋を根絶やしにする程の「政敵たちの、徹底した憎しみ」の根源にあるものを追尋しようとする。

兼山の体内を流れる「寡黙、厳直、短慮、峻烈」という「野中家の気質」は、兼山の父勘解由の「厳正峻烈」な気質と、祖母山内合女の「傲岸短慮の血」に、土佐藩家老・奉行職（執政）の任にあった野中本家の養父玄蕃の「執政としての厳烈さ」を受け継いだものであった。「厳正剛直で覇気と理想の塊りのような、猛禽類の眼」を持ち、信奉する儒学の「結構の美と秩序の諧調、この地上に小さくとも一つの理想社会を作り出」そうとした兼山の熱情と施政の悲劇が、全子息の死滅とともに幽獄から解放された娘婉の眼により鋭く剔抉される。「婉という女」が歴史小説として有する独自の意義は、土佐藩政史に画期的な業績を残した野中兼山の生涯とその政治の功罪を、娘婉の＜女の眼＞を通して客観的に見定め、明確な批判の視座を確立したことである。

婉はしばしば、父兼山及び婉自身を含む一族の「運命」と「悲運」に言及している。その用例によれば、兼山とその一族を襲った苛酷な「運命」が人間の意志や行為に関わりなく巡ってくる現象、人間の力を超えた支配を指すのに対し、「悲運」はその当事者の「自らの意志」が招来した必然の結果であり、「野中家の血」という血脈の支配であると捉えられる。

（祖父勘解由が）このような悲運な死を迎えたのも一つに自らの意志であった。／勘解由のその悲運の性格は、野中家の血ともいうべきもので、父上にもまた色濃く流れ伝えられていた。〔二〕

この分析を通して、婉の思索は兼山政治の本質を、「寡黙、厳直、短慮、峻烈」という「野中家の気質」「野中家の血」の支配のもとに展開された「野望」の現れであると捉えるに至る。

「私事（わたくしごと）ではない、みんなの為だったのだ――」と、兄上はいつも仰言った。けれども強行された理想と、野望とはどのように異るのであろうか。／彼等のためであったといっても、百姓たちの生命を縮めるような苦役と、国外へ逃亡するほどの困窮の上に、一気呵成に築かれた理想と、野望とはどのように相違するものであろうか、四十年

幽囚のわたくしに、それが赦せないように、政敵の人々にとっても許せなかったのだ、という実感が、わたくしの心の隅にある。〔三〕

父兼山の理想とその実践の全てを「野望」であると規定する婉の思念は、父の政治に対する決定的な批判であり、断罪と言うべきものである。兼山の遺族に加えられた政敵の「執拗な憎しみ」と、兼山の血筋の抹殺を目的とした禁獄の根源をなすものを洞見した言葉であった。

四十年間にわたり、男系血筋の死滅を絶対条件とする苛酷な報復を与えた政敵方の怨念の根源を洞察することは、父兼山の「仕置き」の代償との対決であり、それをどのように抱え込むかが幽囚から解放後の婉の生を規定することになる。父の業績を理想化し、父との一体化をはかることが幽閉生活の支えであったとすれば、解放後の婉の生は父の事業の客観化と批判の視座の確保による〈自立〉によって見定められる。その位相を作者大原富枝は次のように記している。

政治は人間のためのものである。彼はときにそれを忘れてしまうほど、理想に憑かれていた。人間を忘れたとき、政治も理想も、彼に復讐しようとした。兼山が悲劇の人であるのは、死ぬまでそのことに気づかなかった、ということである。そのことを、私は女の眼で、娘である婉にしっかりと見せているつもりである。[21]

批判の視座を確立した婉の思索を通して、兼山の施政の内実とその必然としての失脚という、その悲劇の因は次のように客観的に分析される。

◇兼山の施政はその「学問で得た知識」（海南学）による「理想の具現」「芸術」であったこと。

◇兼山の「器量が大きすぎた」ために「嫉視中傷に足をすくわれ」たこと。

◇その施政の「独断専行」と急進への藩内の反発。

◇「土佐二十四万石は実収三十余万石」と言われた兼山の経綸、「郷士制度」が幕府の警戒を生み、幕藩体制下の外様藩の微妙な藩政運営から逸れるものであったこと。

（八）

◇母方の儒葬が「吉利支丹と謀叛の疑惑」により「幕府の不審の詮議を受けた」こと。

◇藩府の面目を失わしめたこと。

◇連続した灌漑事業に「生命を削る苦役」への百姓らの怨嗟。

◇政治の非情な力学。

婉の眼と思索を通して解明される野中兼山の人物像とその事績の分析は、兼山の事績を顕彰する多くの文献、「婉という女」以後に刊行された研究書と比較しても綿密である。この作品に寄せる大原富枝の準備の周到さが窺われる。

こうして、禁獄生活の間に兄清七、母、乳母らの教えにより形成された〈公的な存在〉としての父親像、幽閉生活の生きる支えであった偉大な偶像は解体・変質する。そこに立ち現れてくるのは、自ら信奉する海南学に魅惑され、その理想の芸術的な完成のために情熱と生涯の全てを傾注し、悲劇的な結末を迎えた「あわれ」な敗北者像であった。冷笑と憐憫の情を含んだ婉の冷めた視線は、その悲劇の本質を透視する。

◇学問的な理想実現のための独断専行への藩府の報復の完遂。

傲岸剛直、独断専行した父上によって、かつて加えられた侮辱への、彼の人々の復讐は、お互の死後久しいいま、ようやく完全に、まったく完全に成し遂げられた。／彼の人々の執拗な憎しみは、ここに見事に完成した。（略）わたくしは冷たくうっすらと笑わずにはいられない。（傍線引用者）〔三〕

◇兼山の器量への世俗の過大な評価と、その期待が招来する悲劇の予測。

父上がもしも幕府に参画されたとしたら、その運命は更にさらに大きな悲劇を招いていたのではあるまいか、とわたくしは愕然としたのであった。〔三〕

◇政治という複雑怪奇な生き物にからめ取られて失意の生涯を閉じた父親への同情。

火に身を灼く虫のように、理想を追うてそんな危険をさえ敢えて

しようとした父上という男の夢を、秘かにあわれと思っただけである。〔三〕

◇父の事業を代表する「河戸の堰」への思い。

これはわたくしの初めてもつ、父上との対面であった。わたくしの受けた執拗な憎しみの由来とのであいであった。（略）それだけのことであったのだ。〔三〕

◇父の事業への村人の素朴な感謝の気持と婉の冷笑。犠牲の拒否。

先生は百年の先までお見通しのお仕置をなされたと、村では神さまのように申します――わたくしはうっすらと笑った。／――子や孫は豊作をたのしんでいる。しかし、その父祖は生命を縮めたかも知れない。自分のいまのこの生命こそ大切だ、とわたくしは秘かに心に思い決めている。私の生涯が一つしかないように、彼等の生涯もただ一つしかなかったのだ…と。／どのような偉大さの犠牲にも、わたくしはなりたくない、と思う。〔三〕

幽獄を出て高知に向かう道筋、婉の眼に映じた兼山の灌漑事業の跡は四十数年の風雪に耐えて、無心に静かに流れていた。それは、政敵たちの嫉視、中傷、そして遺族への迫害を誘発するに十分な兼山の「奉行としての仕合せ」を証するものであり、父の幸せを思う婉の心の内面に犠牲に生きた妻子の側からの批判が明確に浮上してくる構図をなしている。

五　「もの」への回帰

幽囚生活から解放後の婉の動静を描く第四章「生きること」は、作者が筆写して保持した婉の谷秦山宛書簡の写しと、秦山関係の史料をもとに構成され[22]、婉と秦山の私的な交流のさまが細叙される。そこで、作者は獄舎の中で完璧なまでに高められた「婉の愛が、自由を失い、基盤をくだかれ、さらに追いつめられてゆく[23]」過程を丹念に書き込んでいく。

婉が初めて出会った秦山は、獄中で夢想された男性像に反して、貧弱な肉体の持ち主であった。婉の手を握り、婉の美貌に心を動かされ、男の体臭を発散させる秦山は、婉との肉体的結合は避けつつ、妻を孕ませる生臭い＜男＞そのものであった。学者として野望のために婉とは全く別の世界を生きる男であり、野中家の血脈の継承のために婉の婚姻と出産を画策する男であった。秦山は、裏切り行為として衝撃に沈む婉の胸中や思慕の情には無頓着に、父兼山と同じく藩政（お仕置）に関わって失脚し、十二年間の蟄居生活ののちに死を迎える。婉には残されたその書物のみが秦山との絆であり、書物を通しての対話が孤独な老残の身を生きる婉の心の支えとなる。

最終章は「挽歌」と題されている。そこでは婉は自らを「物」に例える。

どのようなお仕置が、わたくしの周りにひしめこうと、渦巻き荒れようと、わたくしはもう一切関わりがない。わたくしはもうあらゆる人にも、あらゆるものにも、全く他人であった。／誰ももうわたくしをこれ以上壊すことはできないかわりに、どんな人の情もわたくしを温めることはできない。わたくしはもう人であるよりも、むしろ物に近かった。（略）再び先生はわたくし一人のものとしてここに帰ってこられた。相逢わなかった昔、幽獄でそうであったように、柴の門を閉したこの幽獄に、いまわたくしは、先生と二人だけで坐っている。／一つの幽獄をでて、別の幽獄にわたくしは移ったのであったことを、それだけに過ぎぬことを、いまにして知るのであった。

ここに言う「物」とは何か。あらゆる政治や社会の動静に束縛されず壊されない「わたくし」とは何者なのか。ここに至って、小説世界は「物」として「置かれて」ある状況（幽獄・幽囚）から、世俗の檻（幽獄）の中で「物」として生きる「絶対孤独[24]」への転移を語ろうとする。肉体的制約と引き換えに精神的自由を保持しえた幽囚の境涯から解放された婉が直面したものは、秦山の妻の存在、婉に寄せる世間の好奇の眼、公人である秦山への接近の自制、秦山の心理への配慮などの＜精神的制約＞

と、秦山・弾七との肉体的結合の夢想、野中家の血脈保持を目的とした藩主による婚姻・出産の要請と、それを奏上した秦山の愛のかたちなどの〈肉体的制約〉であった。「お仕置」に連座した秦山の死は、婉から永遠に秦山との肉体的結合の機会を奪うとともに、秦山の妻の存在、世間の眼、政治の干渉などの世俗の檻（掟）から婉を解放し、秦山との精神的な結合の自由を保障したのであった。

婉がたどり着いた境涯を、与那覇恵子氏は次のように説く。

婉はこの世の出来事（掟）とは無縁な「もの」として在る「わたくし」という認識を獲得する。何者にも束縛されない自由な「わたくし」になったのである。男の残した著述と共に生きること、「仄暗い居間に終日先生と合い対し、語り合うこと」が、婉の選択した自由な生き方であった。作者の語る「書くことは生きること」を、婉は読むことで実践したのである。[15]

しかし、「制度の掟に左右されない自分なりの〈魂の王国〉の中で生きる」その境涯は、愛する秦山の〈男の肉体〉を身辺から永遠に排除するとともに、婉自身にもまた〈女〉からの離脱を要請するものであった。男姿の町医者として宝永・正徳・享保の世を生き抜いた婉は、「お仕置」という男の支配・男の庇護から離脱するとともに、世間という檻の中であらゆる外界の影響・支配を拒絶する「物」と化することにより、〈精神の絶対自由と秦山への愛の永遠化〉を果たしえたのであった。

そのことはまた、戦時下に作者大原富枝に愛を語り、欲望の充足のために肉体的結合を迫るとともに、婚姻を許されない結核者との児を残すことを恐れて堕胎を要求した恋人との過去の清算をも意味した。その恋人は一方で富裕な家の跡取り娘と結婚する。血脈の継承により家の存続をはかる世間の論理の重さと、その女の健康で成熟した肉体への恐れ、種の存続のための出産のみを目的とした結婚と、その目的に奉仕する女の肉体の意味を問いつつ、性的結合さえおぼつかない自らの貧弱で未成熟な肉体の劣等感に苛まれ続けた大原を残し、恋人は交渉のあった八年間自ら誠実であったとの言訳のみを残して戦死してしまったのであった。

秦山の行為の裏切りへの悲しみから許容と愛の永遠化への道筋は、大原富枝の心に深い傷痕を残した恋人の裏切りへの怒り、悲しみから〈許しへの道筋〉に重なる。歴史上の女性野中婉の造型を通して自己の体験と心情を投影するという創作の試みは、昭和四十九年、六十二歳の時に刊行された自伝的長編『眠る女』において再び作者自身の過去として追懐されることになる。社会のあらゆる干渉を拒絶した主人公婉に仮託された作者の冷え切った孤独な魂は、その融解のためにさらに十四年の歳月を必要としたのであった。

（平成十六年四月十二日受理）

〔注〕

（1）角川文庫『婉という女』（昭和三十九年〔一九六四〕）「あとがき」。

（2）「男の政治の理想・野中兼山」（「歴史と人物」昭和五十六年〔一九八一〕）、『大原富枝全集』第八巻（平成八年〔一九九六〕、小沢書店）所収。

（3）「文学的個性の創造」（昭和文学全集19『中里恒子・大原富枝・大庭みな子・芝木好子・河野多恵子』昭和六十二年〔一九八七〕、小学館）。

（4）上田三四二「解説・女のしぶとさと勁さ」（『現代文学秀作シリーズ・婉という女』昭和四十六年〔一九七一〕、講談社）。

（5）「大原富枝『婉という女』の成立」（「日本文芸研究」三十五巻二号、昭和五十八年〔一九八三〕六月）、「大原富枝『婉という女』の世界」（「梅花短大研究紀要」四十四号、平成八年〔一九九六〕三月）。

（6）『告げる言葉―風のなかのあなたに』は昭和五十年〔一九七五〕五月、大和書房刊。

（7）『建礼門院右京大夫』は昭和五十年〔一九七五〕四月、講談社刊。

（8）野中婉に関わる史実と創作との異同については、曽根純子「大原

富枝研究―『婉という女』における史実と創作―」（「高知大国文」九号、昭和五十三年〔一九七八〕十二月）に比較研究がある。

（9）「私の取材ノート―婉という女」は「読売新聞」に昭和四十六年〔一九七一〕十一月十四日より八回連載。

（10）大原富枝が披見・引用した兼山・婉関係資料に関する調査結果は以下のとおりである。

野中兼山関係では、兼山・合女と野中家の気質、母万、小倉少助、南学の事、兼山の事績、兼山弾劾書と藩の処置、幕府の関わり、古槙次郎八殉死の件など、その主要な史実と筋立を『偉人野中兼山』（西村青藍著、明治四十四年〔一九一一〕、野中兼山祭典事務所）を主たる典拠とし構成しており、同年刊の『野中兼山全』（辻重忠・小関豊吉著、明治四十四年、冨山房）、『南海之偉業―野中兼山一代記』（松野尾儀行著、明治二十六年〔一八九三〕、開成社出版）、『野中兼山』（川添陽著、昭和十年〔一九三五〕、高知県教育会）などを参看したと考えられる。

野中婉の谷秦山宛書簡の引用は筆者の写しを用い、詩歌の引用は『偉人野中兼山』付録「明夷軒及安履亭の遺稿」の五「安履亭（婉子）女子の詩歌」に拠っている。

（11）角川文庫『婉という女』の「あとがき」に、作者は「婉の直筆の手紙」二十六通を披見し、「この婉の自筆の手紙を見ることができたということが、私と婉との決定的な結びつきになった」と記している。一方、「作品の節目、節目に」（全集第六巻付録、平成八年〔一九九六〕）には、「野中婉の手紙の写本を見せて頂いた」とあり、「谷秦山に宛てた二十四通ほどと他に二、三通あった」と記されている。

（12）（9）に同じ。

（13）「歴史の中に生きるふるさとの女」（「中日新聞」昭和四十五年〔一九七〇〕二月二十五日）全集第八巻所収。

（14）大原富枝は「阿佐ヶ谷・戸塚二丁目」（全集第二巻付録）に「野中婉との出合も、療養生活の十年を抜きにしては、わたしの文学として結実することは、むつかしかったと思っている。」と記している。

（15）（9）に同じ。

（16）（9）に同じ。

（17）（3）に同じ。

（18）「作品の節目、節目に」（全集第六巻付録）。

（19）大原富枝「婉という女・女は生きる」（『わが小説』所収、朝日新聞学芸部編、昭和三十七年〔一九六二〕）。

（20）「婉という女」の本文の引用は全集第一巻（平成七年〔一九九五〕）に拠った。

（21）（2）に同じ。

（22）谷秦山関係の引用は『秦山集』巻三「和」野中夫人見レ贈」、巻七「丁酉歳除」、同「戊戌歳旦」、巻十一「與」野中継善」、巻四十八「祭」野中継善」文」に拠る。また、秦山、渋川春海関係の史実は、西内雅著『渋川春海の研究』（昭和十五年〔一九四〇〕、至文堂）、同氏著『谷秦山の神道』（昭和十八年〔一九四三〕、高原社）、同『谷秦山の学・皇国学の規範』（昭和二十年〔一九四五〕、冨山房）を踏まえていると思われる。

（23）（5）長谷川和子「大原富枝『婉という女』の世界」。

（24）鈴木昭一「大原富枝論」（「青須我波良」八号、昭和四十九年〔一九七四〕五月）。

（25）与那覇恵子「作家ガイド・大原富枝」（『女性作家シリーズ3・佐多稲子・大原富枝』所収、平成十一年〔一九九九〕、角川書店）。

A Study of "En to iu Onna" by Tomie OHARA

Tosikazu KATSUKURA

contents

1 rejection to historical novel
2 position of "Aki— kinuta"
3 meaning of life
4 transition of father's image
5 return to inorganic matter